土浦発

未来への伝承 ㊽

中世人の信仰のかたち 板碑

今回の未来への伝承では、中世に発達した石造物「板碑」を紹介します。

日本の仏教美術史の中で、中世（鎌倉・室町時代）の関東地方で顕著に発達したものとして鉄製の仏像と、板碑という板石でできた石塔の２つが挙げられます。この両者を造立した主体は、武士や上層農民などの地域の支配者層であったと言われ、特に後者は土浦市内でも多数見ることができます。

市内の板碑で文化財指定を受けているものには、下坂田の板碑（県指定、以下はすべて市指定）、東崎鷲神社の板碑、田宮地区の石造六字名号板碑、藤沢東町地区の石造二十三夜供養板碑、田宮梶ノ宮神社境内の湯殿山時念仏供養板碑などがあります。

石造六字名号板碑（田宮地内）
市指定文化財。黒雲母片岩製で、高さ約75センチメートル。中央上部に阿弥陀如来の梵字を蓮台にのせ、「南無阿弥陀仏」の六文字が大きく下に続く。右側には、「念仏之供養願衆二十五人」、左側には、「天正八年十月十六日」と刻まれる。

板碑の基本的な用途は、供養を目的とした卒塔婆で、塚や供養を行うべき場所に立てられました。ここでいう供養には２種類あり、生前に自分のために供養を行う「逆修」と、死後に遺族が行う「追善」の二つがあります。発掘調査の出土例の中に、稀に板碑の下から火葬骨が出土することがあるため、一部では墓標として使われたものもあるようです。

板碑の表面には、定型化された文字や装飾などが刻まれます。一字で各種の仏を表す梵字（古代インドのサンスクリット文字）が蓮の形の台（蓮台）に乗せられ、その下に年号などの銘文が入るのが基本形です。場合によっては、梵字の上に天蓋、蓮台の下に花瓶などの装飾が加わることもありますし、阿弥陀三尊の場合には脇侍である勢至・観音の両菩薩が小型に表現されます。銘文にも、経文の一部を入れる場合や板碑を立てる趣旨を書くこともあります。

関東地方の板碑の材質は、埼玉県秩父長瀞周辺の荒川上流域からとれる緑泥片岩と、筑波山南麓から産出する黒雲母片岩の２種類があります。両者ともに板状に割れる特徴を持ち、緑泥片岩は灰味ある緑色、黒雲母片岩は黒褐色をしています。板碑の多くは頂部を山形に加工しますが、材質の差から前者を用いた板碑を「武蔵型」、後者を「下総型」といい、近年では後者の中で頂部を山形に加工していないものを「常陸型」と呼ぶこともあります。

最古の板碑は、一般には埼玉県熊谷市の嘉禄三（１２２７）年の武蔵型阿弥陀三尊像と言われています。茨城県内では、常陸型で常総市蔵持の建長五（１２５３）年、武蔵型で結城市内の国道工事出土の弘長二（１２６２）年のものが最古です。土浦周辺地域は、黒雲母片岩の常陸型が主流ですが、稀に埼玉産の武蔵型も見ることができます。

銘文を見る限り、鎌倉時代から室町時代の中頃にかけては個人か家族規模の供養を目的に板碑を造立する場合が多いです。戦国時代に入ると、不特定多数の人々が連名で造立する例も増え、集団信仰の記念碑的なあり方が強まるものと考えられています。

今回、代表的な板碑の写真パネルと武蔵型板碑の参考例を上高津貝塚にて展示いたします。ぜひお立ち寄りの上、ご見学ください。

問 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎８２６・７１１１）